

右肘の靭帯を痛めて故障者リスト(DL)入りしている米大リーグ、ヤンキースの田中将大投手(二色)がキャッチボールを再開した。今季中にマウンドへ戻ることを目指しているが、肘の靭帯を痛めた投手は手術を受けるのが一般的だ。手術を回避して最新の再生療法による復帰を図る田中投手には大リーグはもちろん、スポーツ医学界からも注目が集まっている。

(樋口浩一)

## 核心

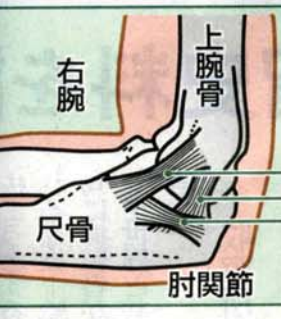
# 田中将 早期復活の道

### ① 投手の職業病

田中投手がキャッチボールを再開したのは四日。肘の痛みを訴えた七月八日のインディアンス戦以来、二十七日ぶりのことだった。「一つステップアップができたということ、ほっとしている」。明るい表情で話した田中投手は「一日も早く良くなるのが一番だが、焦らずに治していい状態で(マウンドに)上がれるようにしたい」と、医師の指示に従って慎重に復帰を目指すという。

けがの正式名は「右肘内側側副靭帯の部分断裂」。靭帯と

田中投手が部分断裂した  
右肘内側側副靭帯



## 右肘手術避け 最新再生療法

は関節の骨と骨をつなぐ带状の結合組織で、そこが傷ついてしまった。投手の職業病といえるもので、通常はトミー・ジョン手術と呼ばれる靭帯修復手術を受ける。日本人投手でもメッツの松坂大輔(三)、カプスの和田毅(三)、藤川球児(三)各投手が経験した。

### ② 血小板を注入

ただ、田中投手は現時点では手術は受けない予定だ。球団担当医のクリストファー・アーマド氏ら専門医の意見で、手術よりもPRP療法で回復を図ることにした。PRPとは「Platelet Rich Plasma(多血小板血漿)」の略で、組織の増殖や再生を促す血小板を自身の血液から取り出し、患部に注射する再生療法の一つだ。

アーマド医師はこの療法のメリットに「早期回復」を挙げる。手術すると、復帰までに一年から一年半かかるが、



手術を回避して復帰を目指す田中将投手。痛めた右肘の状態を自らチェック=7月25日、ニューヨークで(共同)

大リーグ二年目の昨季にオールスター戦で先発するなど、奪三振を重ねる本格派の右腕。ところが、昨年八月末に右肘靭帯の部分断裂が発覚した。当初は手術を回避してPRP療法を受けたが、結局一カ月ほどしてから手術を受けることになり、いまだに復帰していない。

### ③ 複数の復帰例

肘の靭帯修復手術は一九七四年にドジャースのトミー・ジョン投手が受けて復帰を果たしてから飛躍的に進歩。現在は成功率90%とされ、故障前より球速が増した例もある。大リーグでは今年のキャンプ以降、約三十人が手術を受けた。

ただ、PRP療法もゴルフのタイガー・ウッズ選手や米プロバスケットボール・リーグのコービー・ブライアント選手が肘の故障から復帰して関心を呼んでいる。大リーグでは二〇〇八年にドジャースの斎藤隆投手が右肘靭帯を部分断裂した際にこの療法を受け、四十四歳の現在も楽天で現役生活を続けている。

た。順調なら九月の地区優勝争いの時期に復帰できる。投手陣の不調からプレーオフ進出も容易でないヤンキースとすれば、負傷前まで十二勝(四敗)を挙げている田中投手は、球団の地元でのメデイアには「手術に踏み切るべきだ」との論調も多い。ヤンキースと同じニューヨークを本拠地とするメッツのマット・ハービー投手の例が記憶に新

一方の靭帯修復手術は米国で青少年への影響が問題視され、高校生が肘を強化するため、正常な肘にメスを入れて失敗し、選手生命を絶たれた例もある。この手術の権威である外科医のジェームズ・ア